

Midwest の遙かな空

平成 26 年 4 月

沼尾 利郎



写真 1

ロードムービーという映画のジャンルがあります。これは旅や放浪を通して主人公がさまざまな出来事や人々と出会い、何かを発見したり本人が変わって行くさまを描いた映画の事ですが、1960～70年代には多くのロードムービーが作られました。良く知られた作品としては「俺たちに明日はない」(1967)「イージー・ライダー」(1969)などがあり、最近では「モーターサイクル・ダイアリーズ」(2004)「イントゥ・ザ・ワイルド」(2007)などがあります。ハリウッドやディズニーが製作する大作や話題作とは異なり、ほとんどのロードムービーは地味で大ヒットはしませんが、実力派の俳優や監督による作品はどれも深みと味わいのある内容となっています。先日私は「ネブラスカ ふたつの心をつなぐ旅」という映画を観ました。これは日本の「東京物語」を現代アメリカに舞台を置き換えたような内容であり、頑固な老父とその息子がアメリカ中西部の旅(写真1)を通して心のふれあいや人生の意味などを見いだす過程を、抑制の効いたさりげなさで表現しています(2013年カンヌ国際映画祭最優秀男優賞受賞)。21世紀のアメリカ映画界にも小津安二郎のような監督がいるのですね。

アメリカ中西部と言えば、今から24年前に私が留学(1990～1992)したのもネブラスカ州のオマハという街でした(写真2)。オマハは米国のほぼ中央に位置し、市街地を抜けるとトウモロコシ畑と牧草地がどこまでも続く典型的なMidwest(中西部)の地方都市です。ミズーリ河畔にあるこの街は起伏に富んだ大地の上に豊かな水と緑に恵まれ、州最大の産業都市でありながら治安は良くて、家族4人で住むにはとても暮らしやすい所でした。2年間の留学期間中には湾岸戦争やソ連崩壊、ロス暴動など大事件が次々と起こり、在留邦人としての緊張感も少しは味わいました。しかし、私たちが知り合った人たちは誰もみな親切であり、4歳の娘はPreschool(幼稚園)で、妻と1歳の息子は教会の母親サークルで暖かく迎えられ、多くの友人ができました。異郷にあるときほど、人の情けが身にしみることはありません。9・11のテロやリーマン・ショックの起こる遙か以前のことですから、思えば平和な時代でした。

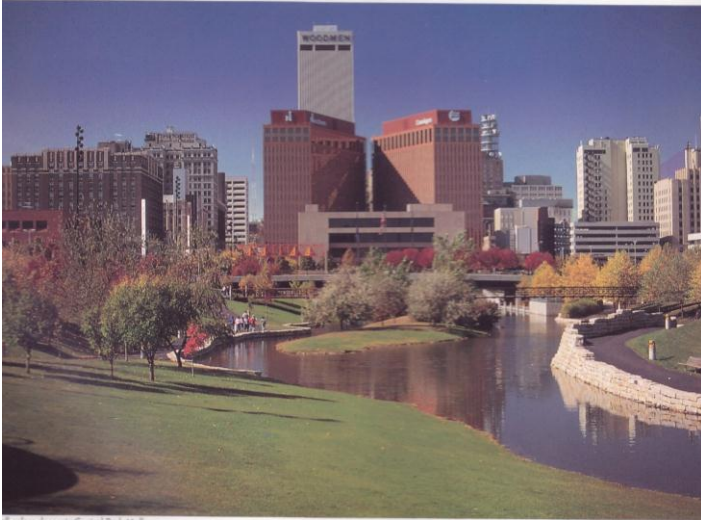


写真 2

私が在籍した研究室にはアメリカ人以外にカナダ・メキシコ・フランス・中国・ベトナム・アフリカからの留学生や研究者がおり、毎日が刺激的でしたが自分の研究体制はすべて1からのスタートで、とにかく大変でした。多様なスタッフとの仕事で学んだ事は、「自分の意見は明確に主張すること」「ハードワークで結果を出すこと」「クリティカル・シンキング（批判的思考）で権威や前例に盲従しないこと」でした。当時は必死だったので特に苦労したとは思いませんが、今考えればよくあんな事ができたものです。個人的な経験から言えるのは「若いときの苦労は何事にも代え難い財産になる」という事実であり、「青年は荒野を目指せ！」という言葉です。最近では日本人の海外留学が減少しているようですが、もし留学の機会がありそれが出来る状況にあるならば、ぜひ積極的に外国へ行く事を勧めたいと思います。

期待していたほど英語は上達せず実験もずいぶん失敗を繰り返しましたが、それでもやはり、海外で暮らした2年間は家族と私にとって大変貴重な経験であり、fruitfulな（実り多い）ものでした。旅行で訪れた国立公園の雄大な風景もさることながら、住居の近くに広がる美しい自然とそこで出会ったさまざまな人々、そして何より、「ゆとりのある生活の豊かさを知る事ができたことは留学のもう1つの大きな収穫であった」と、いま改めて思っています。